

# 大学生ボランティアの教育効果および受け入れ施設への効果

高橋恵美利・金井 敏

The effects of university students' volunteer work  
on education and receiving facilities

Emiri TAKAHASHI · Satoshi KANAI

高崎健康福祉大学紀要 第18号 別刷

2019年3月

# 大学生ボランティアの教育効果および受け入れ施設への効果

高橋恵美利・金井 敏

(受理日 2018年9月14日, 受稿日 2018年12月20日)

## The effects of university students' volunteer work on education and receiving facilities

Emiri TAKAHASHI · Satoshi KANAI

(Received Sept, 14, 2018, Accepted Dec, 20, 2018)

### 要 旨

学生におけるボランティアの参加には、地域貢献の側面に加え、キャリア教育としての側面もあり、社会人基礎力、自己効力感や自己有用感を高めるともいわれる。本検討では、ボランティア活動が、参加学生、受け入れ施設の双方にどのような効果を与えているのか、また満足度の高いボランティア活動について検討するためアンケート調査を行った。

調査は学生対象調査とボランティア活動受け入れ施設対象調査の二つの調査から構成した。学生対象調査は2017年12月～翌年1月にA大学在籍学生に対しウェブを用いて行った。受け入れ施設対象調査は、2017年12月に郵送調査にて実施した。

ボランティア活動に参加した学生、受け入れ施設は、学生1名を除き全員が、学生のボランティア活動に「満足」「まあまあ満足」と回答した。学生を対象とした、「ボランティア活動経験を通し社会人基礎力の12項目それぞれについてどのくらい力がついたか」の設問で、学生自身がより力がついたと感じていた上位5項目は、受け入れ施設が重視する項目と合致していた。受け入れ側が求めるものが、ボランティア活動への参加でさらに向上することが示唆され、継続的に活動することで各項目がより強化されることが期待できるものと考えられる。

### 緒言

近年、都市化や核家族化・少子高齢化等の進展により、地域の連帯感、人間関係の希薄化が進み、個人が主体的に地域や社会のために活動することが少なくなっている。その中で、青少

年における奉仕活動・体験活動は、個人が経験や能力を生かし、個人や団体が支え合う、新たな「公共」を創り出すことに寄与するものであり、社会全体として推進する必要がある。また、青少年の時期には、学校内外における奉仕活動・体験活動を推進する等、多様な体験活動の機会

を充実し、豊かな人間性や社会性などを培っていくことが必要である。そのような機会の充実を図ることが、社会に役立つ活動に主体的に取り組む、新たな「公共」を支える人間に成長していく基盤にもなると期待される<sup>1)</sup>。

学生におけるボランティアの参加には、地域貢献の側面に加え、キャリア教育<sup>2)</sup>としての側面もあり、社会人基礎力や自己効力感を高めるともいわれる。アメリカではサービス・ラーニングという地域社会におけるボランティア活動と教科学習を結びつける概念がある。たとえば看護教育法としてのサービス・ラーニングの教育効果をみた文献レビュー<sup>3)</sup>においては、学生・教員・地域の3者から多くの成果があることが示されている。学生への成果としては専門的知識・技術の学業成績の改善、価値観の洗練、人とかかわる技術の向上、リーダーシップ力の開発、キャリア選択の明確化、生涯学習とサービスの確立に関連していたとする報告<sup>4)</sup>があり、参加者、仲介者、大学の3者への効果をみた先行研究<sup>5)</sup>では、参加学生全員が、サービス・ラーニングの素晴らしさの実感から、他の学生にもその体験を奨励しており、全てのパートナー(受入側)から再び実施することを要望され、大学は組織の資源リストに追加されたと報告されている。しかしながら、本邦では、ボランティア活動受け入れ側のニーズや、受け入れ側から学生の活動を評価した調査はほとんどない。

本研究では、ボランティア活動が、参加学生に対してどのような効果を与えているのか、また受け入れ施設にはどのような効果を与えているのか、また双方にとって満足度の高いボランティア活動について検討するためアンケート調査を行った。

## 方法

### 1. 学生対象調査

(1) 対象：調査期間にA大学に在籍する学部生(全学科、全学年)

(2) 調査方法

自記式アンケート調査を実施した。学生用ポータルサイト内にアンケート項目を設定し、学生自身がPC・スマートフォン等の端末で回答を入力するものとした。調査期間は①2017年12月1日～22日、②2018年1月10日～31日とした。

(3) 調査項目

①基本情報：性別、所属学科、学年、社会人基礎力

②参加したボランティア活動の情報：ボランティア活動経験の有無、(参加した経験のない者のみ)参加しない理由、活動頻度、活動内容、ボランティア活動応募の動機、活動は大学ボランティア・市民活動支援センター(以下、VSC)を通じたものだったかどうか、(VSCを通じたものだった場合)活動への満足度とその理由、相手施設に応えられた度合、社会人基礎力向上の実感、授業へのモチベーションへの影響、今後の活動継続への意欲とその理由

なお、社会人基礎力とは、経済産業省が提唱している「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を指す。

### 2. 受け入れ施設対象調査

(1) 対象：

2016年4月から調査時点(2017年9月)の間にVSCを通し、学生ボランティアの受け入れ実績のある151施設の学生ボランティア連絡担当者

## (2) 調査方法

2017年11月に調査票を各施設に郵送し、返送にて回答済みの調査票を回収した(自記式アンケート調査)。調査期間(回収期間)は12月1日~22日とした。

## (3) 調査項目

①基本情報：施設の種類、ボランティア募集方法、受け入れ実績

②ボランティア受け入れに関する情報：学生のボランティア活動の具体的内容、学生ボランティアを依頼する理由、期待する資質、学生の活動への満足度、ボランティアを受け入れて得られたこと、等

## 3. 分析方法および統計的事項

学生のボランティア参加率、社会人基礎力の変化(自己評価)、活動の満足度について記述的に分析した。

また、学生の活動に参加して満足した群と「まあまあ満足」、「やや不満」を合わせた群の間で、社会人基礎力各項目についての成長度をMann-WhitneyのU検定で比較した( $p < 0.05$ )。

解析にはIBM SPSS Statistics version 23を用いた。

## 4. 倫理的事項

本研究は、「人を対象とする医学研究に関する倫理指針」に従って、高崎健康福祉大学研究倫理審査委員会にて承認された(高崎健康大倫第2932号)。

## 結果

### 1. 学生対象調査

平成29年度在籍者数2,415名のうち、117名

が回答した(回収率4.8%)。女性が81.2%であり、全学科、全学年から回答を得た。回答者背景を表1に示す。

回答者のうち、活動に参加したことがあるのは85名(72.6%)であった。活動しなかった32名の主な理由は、「活動する時間がない」、「勉強が忙しい」、「他の余暇活動をしたい」であった。

活動経験者の活動頻度として最も多いのは不定期が60名(70.6%)であった。活動内容としては、「子ども」、「障害者」、「高齢者」を対象とした活動が多かった。

ボランティア活動に参加した主な理由として、「内容に興味があった」、「単位取得につながるから」、「自分の専門性に役立ちそうだったから」が挙げられた。ボランティア活動に参加しての満足度(VSCを通して活動した者のみ対象とした設問)は、「満足」が34名、「まあまあ満足」32名のほか、1名のみ「やや不満」と回答した。参加して満足した理由は、主なものとして「たくさんの人たちと知り合えた」、「利用者や対象者の理解に役立った」、「社会や人の役に立つことができた」、「生きがい・やりがいを感じた」が挙げられた。

「社会人基礎力」の12項目それぞれについて「ボランティア活動を通してどのくらい力がつきましたか」との設問では、「かなり力がついた」、「ある程度力がついた」を合わせると、「1物事に進んで取り組む力」、「3目的を設定し確実に行動する力」、「8相手の意見を丁寧に聴く力」、「10自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」、「11社会のルールや人との約束を守る力」で、より力がついたと感じていた。

満足した群( $n=34$ )と「まあまあ満足」、「やや不満」を合わせた群( $n=33$ )で、社会人基

表1 学生回答者背景

(n=117)

		n (%)
性別	女性	95 (81.2)
学科		
	医療情報学科	14 (12.0)
	社会福祉学科	13 (11.1)
	健康栄養学科	14 (12.0)
	看護学科	21 (17.9)
	理学療法学科	4 ( 3.4)
	薬学科	27 (23.1)
	子ども教育学科	24 (20.5)
学年		
	1年次生	34 (29.1)
	2年次生	16 (13.7)
	3年次生	30 (25.6)
	4年次生	28 (23.9)
	5年次生	7 ( 6.0)
	6年次生	2 ( 1.7)
ボランティア参加経験の有無		
	あり	85 (72.6)
参加したボランティア活動の種類 (n=85, 複数回答可)		
	子どもを対象とした活動	59 (69.4)
	障害者を対象とした活動	33 (38.8)
	高齢者を対象とした活動	30 (35.3)
	まちづくりのための活動	21 (24.7)
	スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	19 (22.4)
	健康や医療サービスに関係した活動	17 (20.0)
	災害に関係した活動	14 (16.5)
	国際協力に関係した活動	9 (10.6)
	自然や環境を守るための活動	5 ( 5.9)
	安全な生活のための活動	1 ( 1.2)
	その他	9 (10.6)
ボランティア活動に参加して満足しているか (n=67, VSCを通して活動した者)		
	満足	34 (50.7)
	まあまあ満足	32 (47.8)
	やや不満	1 ( 1.5)
	不満	0 ( 0)
今後ボランティア活動を継続したいか (n=67)		
	もっと活動を増やしたい	14 (20.9)
	現状レベルで続けたい	41 (61.2)
	活動を減らしたい	5 ( 7.5)
	活動を辞めたい	7 (10.5)

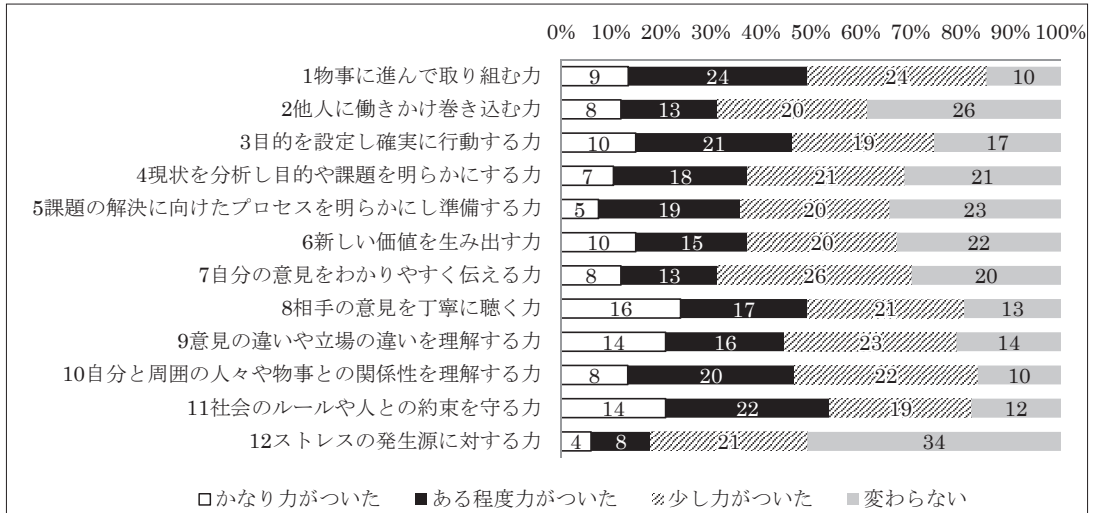


図1 ボランティア参加後の社会人基礎力の変化 (n=85) (棒グラフの数値は人数 (n))

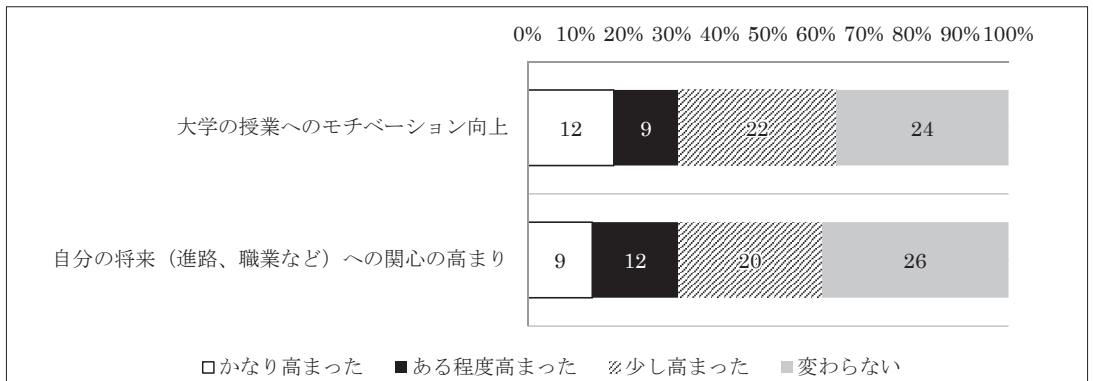


図2 ボランティア参加後の大学の授業へのモチベーションおよび将来への関心の変化 (n=67) (棒グラフの数値は人数 (n))

礎力各項目についての成長度を比較すると、「4現状を分析し目的や課題を明らかにする力」、「5課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力」、「6新しい価値を生み出す力」、「7自分の意見をわかりやすく伝える力」、「10自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」、「11社会のルールや人との約束を守る力」の6項目で有意な差がみられた (p 値は順に, p=0.024, 0.008, 0.027, 0.008, 0.033, 0.012)。

また、ボランティア活動に参加した後の、大学の授業および自分の将来 (進路、職業など)

への関心については、回答者の3割程度は、「ある程度～かなり高まった」と回答し、「少し高まった」まで加えると7割弱の学生で高まったと回答があった。

今後のボランティア活動の継続希望については、現状レベルで継続、あるいはもっと活動を増やしたいとの回答が55名 (82.1%)であり、活動をやめたい、あるいは減らしたいと回答した者の理由は、「時間的理由がなくなった」が最も多かった (データは未提示)。

## 2. 受け入れ施設対象調査

質問票を郵送した 151 施設のうち、行き先不明が 2 通、回答施設は 91 施設であった（有効回答率 60.3%）。社会福祉法人、特定非営利活動法人で半数強を占め、受け入れ学生の活動としては「子ども」「高齢者」「障害者」を対象とした活動が主であった。対象施設の背景を表 2

に示す。

学生にボランティアを依頼する理由として主なものは、「活動・事業を実施するにあたり、人手が不足するため」68 件、「施設・団体の活性化をはかるため」42 件、「施設・団体の理解と周知をはかるため」39 件、「学生に社会貢献の機会と場を提供したいため」38 件、などであっ

表 2 受け入れ施設 背景 (n = 91)

	n (%)
受け入れ組織区分	
社会福祉法人	34 (37.4)
特定非営利活動法人	16 (17.6)
行政	7 ( 7.7)
学校	6 ( 6.6)
任意団体（ボランティア団体）	6 ( 6.6)
医療法人	5 ( 5.5)
その他法人 / その他	17 (18.7)
2016 年 4 月～2017 年 9 月までの本学学生ボランティアの延べ活動人数	
1～4 名	24 (26.4)
5～9 名	25 (27.5)
10～19 名	15 (16.5)
20 名以上	20 (22.0)
未回答	3 ( 3.3)
各施設・団体で実際に学生が行った活動（複数回答可）	
子どもを対象とした活動	37 (40.7)
高齢者を対象とした活動	22 (24.2)
障害者を対象とした活動	22 (24.2)
スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	17 (18.7)
健康や医療サービスに関係した活動	9 ( 9.9)
まちづくりのための活動	8 ( 8.8)
その他	8 ( 8.8)
学生にボランティアを依頼する理由	
活動・事業の実施に人手が不足するため	68 (74.7)
施設・団体の活性化をはかるため	42 (46.2)
施設・団体の理解と周知をはかるため	39 (42.9)
学生に社会貢献の機会と場を提供したいため	38 (41.8)
利用者・対象者へのサービス向上をはかるため	31 (34.1)
活動・事業を通じて学生を育てたいため	31 (34.1)
学生に自施設・団体に就職してほしいため	15 (16.5)
活動・事業の経費を抑えるため	5 ( 5.5)
その他	3 ( 3.3)

た。

学生に期待する資質としては、多い順に、主体性（物事に進んで取り組む力）、規律性（社会のルールや人との約束を守る力）、実行力（目的を設定し、確実に行動する力）、傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）、状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）

であった。学生ボランティアの活動に、満足しているか、という設問では、回答者全員が「満足」または「やや満足」と回答していた。その理由として主なものは「期待した態度で活動してくれた」、「依頼事項を充足できた」、「利用者・対象者の評判が良かった」が挙げられた。学生ボランティアが活動したことにより良かったことや

表3 施設が学生に期待する資質と満足度

(n = 91)

	n (%)
学生にボランティアに最も期待する資質	
1 主体性（物事に進んで取り組む力）	40 (44.0)
11 規律性（社会のルールや人との約束を守る力）	16 (17.6)
3 実行力（目的を設定し、確実に行動する力）	8 ( 8.8)
8 傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）	7 ( 7.7)
10 状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）	6 ( 6.6)
2 働きかけ（他人に働きかけ、巻き込む力）	5 ( 5.5)
6 創造力（新しい価値を生み出す力）	4 ( 4.4)
9 柔軟性（意見の食い違いや立場の違いを理解する力）	3 ( 3.3)
4 課題発見力（現状を分析し、目的や課題を明らかにする力）	1 ( 1.1)
7 発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）	1 ( 1.1)
5 計画性（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力）	0 ( 0)
12 ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）	0 ( 0)
学生ボランティアの活動に満足しているか	
満足	62 (68.1)
やや満足	26 (28.6)
やや不満 / 不満	0 ( 0)
未回答	3 ( 3.3)
学生ボランティアの活動に満足したこと	
期待した態度で活動してくれた	51 (58.0)
依頼事項を充足できた	48 (54.5)
利用者・対象者の評判が良かった	39 (44.3)
期待した以上に活躍してくれた	23 (26.1)
職員の労力が軽減できた	18 (20.5)
その他	4 ( 4.5)
学生ボランティアが活動したことにより良かったことや得られたこと（複数回答可）	
施設・団体の中が明るくなった	42 (46.7)
利用者・対象者の良い変化が見られた	37 (41.1)
新しい風を入れてもらえた	34 (37.8)
新しい企画や行事を実施できた	31 (34.4)
外部の人材の活用方法がわかった	12 (13.3)
その他	9 (10.0)



得られたこと（複数回答可）として「施設・団体の中が明るくなった」「利用者・対象者の良い変化が見られた」「新しい風を入れてもらった」「新しい企画や行事を実施できた」等の回答が多かった。また、その他として、以下のような意見が挙げられた。

- ・災害訓練を実施できた。
- ・患者会のため、体力的に難しい作業をしていただけるので大変助かります。
- ・若い学生が加わったことにより活動が活発になった。
- ・学生同士での支援の仕方の交流が進んだ。
- ・自分たちの職業を知ってもらえた。
- ・障害児・者の理解が深まり関心を持ってくれた学生がいた。
- ・学生や学校を知る機会となる。こちらのことも理解して頂ける。
- ・学生ボランティアさんが活動していることが高評価だった。
- ・子どもにとって、保護者にとって、学生にとって、私にとって、学習クラブにとって相乗効果を感じた。

## 考察

ボランティア活動に参加した学生は、1名を除き「満足」「まあまあ満足」と回答しており、活動への参加は充実しているものと考えられた。活動内容としては子どもや障害者、高齢者を対象としたものが多かった。これは人を対象とする専門職を多く養成する、A大学の特長を反映したものと考えられ、学生自身も、自分の専門性に合う活動を選ぶ傾向にあると考えられる。今後の活動の継続性については、現状維持または活動を増やしたいと回答するものが多かった。

しかしながら活動には満足しているものの、大学生ということもあり、勉強等で時間が限られるために活動を減らしたりやめたりせざるを得ない現状がうかがえた。ボランティア活動に積極的に参加を促す時期は、各学科や学年の勉強等の忙しさを鑑みながら進めることが求められると考えられる。

ボランティア参加後の社会人基礎力の変化としては、「ストレスの発生源に対する力」を除き、どの項目についても半数以上の参加者が、以前よりも力がついたと回答していた。なお、力が付いた（学生自己評価）上位5項目「1 主体性（物事に進んで取り組む力）」「3 実行力（目的を設定し、確実に行動する力）」「8 傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）」「10 状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）」「11 規律性（社会のルールや人との約束を守る力）」については、受け入れ施設側の、学生に期待する資質として挙げられた上位5項目と合致していた。受け入れ側が求めるものが、ボランティアに参加することで向上することが示唆され、継続的に活動することで各項目がより強化されることが期待できると考えられる。しかしながら、本アンケートで調査した社会人基礎力は、それだけで施設のニーズを表現するものではないこと、あくまでも学生の活動前後の変化の自己評価であるため各自のレベルの絶対的評価ではないこと、また各施設と学生の紐付けを行っておらず、個々のレベルでニーズが合致していたかどうかは判断できないことから更なる調査が必要である。

また、施設側からの意見としては、全施設が学生の活動には「満足」あるいは「やや満足」していると回答しており、満足した理由として、期待通りあるいはそれ以上の活躍をしてくれた、

かつ半数近くの施設では、施設における依頼者だけでなく（施設）利用者の評判がよかったとの回答があった。いろいろな関係者から、活躍を評価されていることが示唆された。学生ボランティアが活動したことにより良かったことや得られたこととして「施設・団体の中が明るくなった」「利用者・対象者の良い変化が見られた」「新しい風を入れてもらえた」「新しい企画や行事を実施できた」等、依頼者だけでなく、利用者からの評判が得られ、かつ新しいことができるようになったなど、前向きな影響があることを評価されていることが分かった。施設・団体にどのような変化があったかについては、様々な活動施設・団体があつたため、さらに具体的な効果についての調査を行っていないが、その他意見（自由記述）として災害訓練や患者会の実施に大きく貢献したり、活動が活発になったりしたことが、学生・施設間の相互理解が進んだとの回答があった。

学生ボランティア活動に関する先行研究におけるボランティア受け入れ側への影響としては、小中学校での学生ボランティア活動において、子供たちとの年齢の近い立場で対応してもらったこと<sup>6)</sup>、特別支援教育における学校支援ボランティアの受け入れ側である教職員に対する人的変化（負担軽減）や若い人が入ることで活気がでたという意見、児童・生徒においては学級全体の学習意欲の向上、ボランティアが来るのを楽しみにしている、等が挙げられている<sup>7)</sup>。学生がボランティアとして活動することで、余裕が生まれ、組織での業務が改善したり新たな業務ができたり、活気が出たりという点では共通した効果が見られたと考えられる。

今回の調査では、学生の回答率が非常に低かったものの、全学科、学年にわたり回答が得

られ、ボランティア活動への参加者・非参加者の意見が得られたことで、学生のボランティア活動に対する考え方の傾向は把握できたものと考えられる。学生は勉強等で時間が限られるものの、参加できた者は、社会人基礎力の変化の自己評価からも、自身の可能性のよい変化があり、それを感じられる者ほど、活動への参加満足度も高い傾向が認められた。今後はさらに、ボランティア実施前後、学生と施設のマッチングの面からも評価を行うこと、入学時から継続的に教育効果を分析していく必要があると考える。

## 謝辞

調査票の配布および収集に協力頂いた高崎健康福祉大学ボランティア・市民活動支援センター（VSC）コーディネーター、吉澤道子氏に感謝する。

調査票の作成検討にご助言頂いた共愛学園前橋国際大学情報・経営コース教授 兼本雅章先生、高崎市社会福祉協議会課長 茂木直美氏、社会福祉法人新生活会法人本部総務部 櫻井淳司氏、高崎市総合福祉センター福祉1グループ長／高崎市障害者サポートセンター～ぷ 藤田テクノ障害者相談支援事業部管理者 高橋俊一郎氏、じいじとばあばの宝物本庄のおうち責任者 飯島紳太郎氏、角田病院地域連携課・相談課医療ソーシャルワーカー 小林一幸氏に謝意を表す。

## 利益相反

本研究において、申告すべき利益相反はない。

## 参考文献

- 1) 中央教育審議会. 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について(答申). 2002年7月29日.
- 2) 黒沢幸子ら. 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長—その様相とキャリア教育の視点からの考察—. 目白大学 心理学研究. 2008, 4, 11-23.
- 3) 松谷美和子ら. 看護教育法としての「サービス・ラーニング」実践研究文献レビュー. 聖路加大学紀要. 2004, 30, 31-38.
- 4) Peterson SJ, Schaffer MA: Service-learning: Isn't that what nursing education has always been?, *Journal of Nursing Education*, 2001, 40(2), 51-52.
- 5) White SG, Festa LM, Allocca PN, Abraham I Jr.: Community service-learning in an undergraduate psychiatric mental health nursing course, *Arch Psychiatr Nurs*, 1999, 13(5), 261-268.
- 6) 阪根健二. 学校ボランティア活動の実態と課題, 香川大学教育実践総合研究. 2006, 13, 15-22.
- 7) 五十嵐靖夫, 紺野亜衣. 特別支援教育における学校支援ボランティアについての考察. 北海道教育大学紀要(教育科学編). 2010, 61(1), 133-145.